

梅花短大 家本 修

山陽学園短大 ○ 隈元 美貴子

目的 被服行動がどのような要因によって規定され、また決定されるのかの因果性の問題は、重要な課題の1つと考える。本研究では課題を明らかにする方法として、被服行動の過程モデルを明らかにし、構造を求めようとする認知論的アプローチを用いる。これらの関係を明らかにするために、まず前年大会では、学生の専攻別でも因子構造に差異が少ないことを明らかにした。本稿では、パス解析モデルから、因果的定量関係について検討を試み、意味ネットワークにおいて生活意識、価値観、被服行動との関係から被服の選択、決定要因について明らかにすることを目的に、方向性を持ったモデル化を検討した。

方法 女子短大生を対象に、質問紙法による集合調査を実施した。実施時期：平成2年12月上旬。調査地域・調査対象者数：岡山市内S短大の90名。質問項目：生活意識や生活信条、価値観、に関する50項目、被服購入時での決定傾向5種、衣生活意識に関する28項目、着用行動、購買行動に関する30項目で、決定傾向を一对比較法で、その他は全て、リッカートタイプの5段階評定法を採用した。

結果 ① 各項目群の主要因子は、「自尊心」「同調行動」「自信」「興味関心」「依存」「知性」等である。② パス解析では、母概念から主要因子との方向性のある関係が認められる。③ ブランド・衝動買い傾向と他者意識が逆相関 ($r = -.2750, P < .01$)、さらに経済観念の乏しい傾向と相関 ($r = .4574, P < .01$) が認められる。④ 服装に関する関心傾向と経済観念の乏しさと相関が認められる。⑤ ブランドは余り好まず衣服を気にしないクラスターは、保守的で無趣味と見られる。以上生活観や意識との関係が認められる。